

ラブ魂

GO ♪ サマ

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

読み切りって意外と連載に繋がるよね。

ラブ  
魂

目  
次

1



## ラブ魂

『ひなた温泉前く、ひなた温泉前く……』

「……ぐうく……んあつ？」

なんだもう着いちまったのか。

……ふわああああああ……」

路面電車が止まり、人が次々と降りて行く……ほど人は乗っていないく、

銀髪パーマで死んだ魚のような目をした男一人降りただけだった。

その男の名は『坂田 銀時』

かつて『天人』との戦争で『白夜叉』の異名を持ち、敵・味方ともに恐れられた『侍』である。

「だいたいよく……こういうのは『プロローグ』的なものがあんのが普通だろうが。『なの魂』然り『ゼロ魂』然り……

イキナリ本編始めやがって……初めて俺のことを見る読者が勘違いするだろくがっ

!!

『あれっ？ 銀さんって赤○先生の作品に出てんだろ。』って勘違いされたらどうすんだ？ この作者は!?

しかもなんで『ラブひな』!?!?

普通は『ネギま』とのクロスオーバーじゃないのっ!?!?

俺魔法使えると思って張り切ったら、何処だよコッ!!

温泉郷だよ温泉郷っ!!

なに？ また『スタンド』との戦いみたいなのがあるのっ!?!?

冗談じゃないからねっ!?!? あんなのが何回もあっちゃや銀さん体持たないからっ!!

ぶつくさ言いながら銀時はいつの間にか長い階段を登っていた。

「…たくっ、まあいいけどよ。

この先の旅館にはイチゴ牛乳がいっぱいあるってバアさんも言っていたし、イチゴ牛乳があるんなら全てOKだ。」

銀時は軽い足取りで階段を上がって行った。

そして一番上に着くとそこには風情のある旅館があった。

「ここだな。バアさんが言っていた『ひなた旅館』つうのは…

思ったよりデケーな。もう少しこじんまりとした旅館だと思ったんだが…」

そして銀時は玄関に入って行った。

「すいませー……んっ!!」

あのお、バアさんに頼まれてきた坂田ですけどおー……!!」

……シ……

物音一つしない。

どうやら誰もいないようだ。

だけどそれに気づかない銀時は………

「あのお……!!」

バアさんに頼まれてはるばる江戸からやって来た坂田 銀時なんですけ

どお……!!」

……シ……

もう一度大声で叫んだ銀時。

しかし、誰もいないので返事は返って来ない。

次第に銀時はイラつき始め、額に血管が浮き始めた。

「あのお……!! すいませー……んっ!!」

源外のクソジじいの実験で異世界に飛ばされたところオ、このクソバアに拾われ  
てエ、ここの管理人になる為に、江戸からやって来た『万事屋 銀ちゃん』の坂田

銀時というものですけどおー……!!」

……シー……シー……シー……

やっぱり返事は返って来ない。

そしてついに銀時の堪忍袋の尾が切れた。

「おいコラア!!」

新しくやって来た新人に対して、無視とはどう言うつもりですかあつ!!

普通誰かいんだろっ!! 歓迎会的なものがあるのが社会人として常識なんじゃない

ですかア!!

取り敢えず!! バアさんが言っていたイチゴ牛乳よこせコラア!!

こちらとらイチゴ牛乳のために2時間も糖分とってないんじやコラア!!」

ドストドスト……

勝手に上がる銀時だった。

糖分をとっていない為、若干イライラしている銀ちゃん。

とりあえず台所に行くことにした。

台所に向かう途中、ふと銀時の足が止まった。

「……と……ろで……」

台所って……どこだっけ?」



「たくつ…：ようやく見つけたぜ」。

「ここの間取り広すぎんだよ。案内板くらい出せコラア。」

ようやく台所にたどり着いた銀時

お目当てのイチゴ牛乳を手に入れるため、彼は1時間も旅館を探索していた。

「階段下に『秘密の入り口』って書かれていたところ入ったら、訳の分からない部屋に着くわ、この旅館の一部屋に入ったら一面ジャングルだわ、

ドア開けたら温泉に繋がってるわ…：…

なにこの旅館？ 本当に旅館なの？

「なんでこんなにアドベンチャーなの？ ここのお客さんはインディージョーンズみたいな人が多いの？」

俺はただ台所に行きたいだけだよ？

イチゴ牛乳飲みたいだけだよ？

「なんでこんなに疲れるの？ そのうちムー大陸の入り口とかありそうだよここ？」

銀時はかなり疲れた様子で愚痴り始めた。

所々服が汚れているのはそのせいであろう。

「まあいいや。」

さてと、イチゴ牛乳を頂くかね〜。」

銀時は冷蔵庫を開けた。

冷蔵庫の中には……………

「んだコレ？」

バナナがいっぱいあるんだけど？

なに？ ゴリラでも飼ってんの？

もしかしてさっきのジャングルか？

あのジャングルにゴリラいんのか？

マジかよ〜。

ゴリラなんてあのストーカーで十分だっつうのっ!!

…それよりイチゴ牛乳は……………」

ドサツ!!

銀時の後ろから何か物を落とした様な音がした。

「あん?」



ウチに任しときい!!

ウチの新作メカの出番や〜!!」

外国人の声と共に戦車のおもちゃみたいなのが出てきた。

褐色の彼女の手にはラジコンのコントローラーみたいなのを持っている。

「いつけえ〜〜〜〜〜つ!!」

ドオオンツ!!

褐色の彼女の号令と共に打ち出される弾丸。

「のわたつ!!」

それをギリギリでよける銀時。

目標を失った弾丸はそのまま銀時の後ろの冷蔵庫に当たり、爆発した。

ドガアアアンツ!!

ドシャアアアアアアアツ!!

「ちよつ、待てえ〜〜〜〜〜!!」

それ、おもちゃじゃねーのかよつ!!」

爆風を受けて部屋から飛び出た銀時は……そのまま一目散に逃げた。

「オイオイオイオイオイオイイイイ〜〜〜〜〜ツ!!」

なんだこゝは〜〜〜〜〜!!

なんで明らかに中学生ぐらいの女が、実弾ぶつ放す戦車のオモチャ持ってんだあー………っ!!

ナニココツ!!?

軍隊!!? 軍隊ですかっ!!

あのチンピラ警察養成所かここは………!!

やべえよっ!! こんなとこに居たら俺の命がナンボあつても足りねーよっ!!

帰ろう!! うん、帰ろうっ!!

もう十分やったよ俺!! そもそもこの作品の主人公じゃないしい!!

ここで頑張る必要はないからね俺っ!!

こんなん作者の思いつきに過ぎないからあ!!

さっさと江戸に返せ作者ア………ツ!!」

…なにやらめちやくちやなことを言いながら全速力で走っている銀時。

その後ろには先ほどもメカが、6体に増えていた。

「いい加減しつこいんですけどお………!!

それになんて増えてんのっ!!?

明らかに銀さん殺す気満々じゃねえーかっ!!」

階段付近に近づくと、階段麓に高校生ぐらいの黒い長髪の女が立っていた。その女の左手には日本刀を持っていた。

「ここで物を盗むとは……運が悪かったな、盗人。」

そう言うや否や女が足を出し、銀時の足を引っ掛けた。

銀時は足に引っかかり転がって行った。

「のわっ!!」

ゴロゴロゴロゴロ………ドスンッ!!

「いたたたたたたたっ!!」

ハゲるっ!! 頭がハゲるっ!!」

そのまま玄関を飛び出て、木にぶつかりようやく止まった。

その音を聞きつけたのか、先ほどの女とは別の女が2人現れた。

「ちよっ!!」

何よっ!! 今の物音はっ!!」

「あ~~~~なる?」

「どうやらドロボーが来たみたいやで?」

「ドロボーッ!!?」

「どこかにいんのよっ!!? そのドロボーはっ!!?」

「ほらあそこにいるやろ？」

木に頭ぶつつけて転がりまわつとる銀髪パーマの男が。」

「男っ!?？」

「……これだから男はー！ー！ーっ!!」

ズンズンズンズンつと音を立てながら銀時に近づくメガネをかけた女

その後ろをついて行く狐目の女

さらにその後ろをついて行く、先ほどまでの女の子たち。

ようやく銀時が頭の痛みが取れて頭を上げると、周りを女の子たちが銀時を取り囲んでいた。

銀時は口を引くつかせながら…

「何なんですかこのヤローツ!!」

いきなり銃弾ぶつ放すわ、足引つ掛けられるわ……………

これが新しく来た人に対する挨拶ですかあゝゝゝ!?？」

するとメガネの女が銀時に指を指し

「うるさいわよっ!! このドロボー!!」

少しでも反省していたら、見逃してあげようと思っただけどっ!!

もう許さないわっ!!」

「…初めから許す気ないやん。」

狐目が何か呟いた。

「カオラ、素子ちゃんっ!!」

お願いっ!!」

「オウツ!! 任せときい!!」

「…まあ、運が悪かったと諦めるんだな。」

褐色の女の子がリモコンを、黒髪の女の子が刀を抜いた。

メガネをかけた女は鼻で笑っていた。

「ここにきて………銀時は遂にキレた。」

「……………がれ……………」

「よっしやー!! 全弾発射ーっ!!」

「神鳴流 斬岩剣っ!!」

ドドドドドドドドドドドドドドドドツ!!!!!!

「あわわっ…なるセンパイ、やりすぎなんじゃ?」

「いいのよしのぶちゃん、これぐらいやらないと男って諦めないんだから。」

ドドドドドド………ドンツ!!

「どうやら全弾撃ち終わったようだ。」



「なるゝゝゝ!! 終わったでゝゝゝ!!」

「ありがとうスウちゃん。」

キツネ警察呼んで、この男を突き出すのよっ!!」

「いやゝ、あの男も災難やなゝ。」

「ここ以外やったら無事やったかもしれへんのかなゝ。」

「そう言つて狐目は銀時の方を見る。」

「そこには先ほどの攻撃で土煙が舞っていた。」



「あ、あんた……何者？」

「あん？　なんだチミはってか？」

銀時は木刀をしまい首筋を搔きながら今更ながらの自己紹介を行った。

『『万事屋 銀ちゃん』のオーナー』『坂田 銀時』でくす。

特技は寝ること、好物は甘いもの

このこのバアさんに頼まれて『管理人』になりに来ましたく。

文句あるかこのヤロー。」

これが、『白夜叉』と『東大受験生』の奇妙すぎる出会いだった。

この先どうなるのか……………

それは……………

作者もわからない。